

松代城跡(3)

—流域松代幹線系花の丸汚水準幹線事業地点—

2009年3月

長野市教育委員会

序

彩り豊かな山並みを仰ぎ、千曲川・犀川の大河に抱かれた長野市では、悠久の歴史の中で、様々な人々の営みが積み重ねられています。地下に残されている数々の歴史の痕跡は、先祖の知恵と文化を今に伝える貴重な財産となります。

松代藩真田家の城下町であった松代は、武家屋敷や町屋、神社仏閣などの歴史的町並みが残っており、往時の景観を今に伝える城下町として知られています。平成16年度には、国史跡である松代城跡の復元整備完成を契機として「エコール・ド・まつしる」の取り組みが始まりました。エコールとは、フランス語で学校を意味します。松代城跡や江戸時代の藩校である旧文武学校、城外御殿である新御殿（旧真田邸）など、様々な文化財が残る松代全体を学校ととらえ、松代で遊びながら学んでもらおうという試みです。松代では、趣味や専門を活かした様々なおもてなし活動を通して、文化財を市民が中心となって守りながら活用していくという気風が生まれつつあります。

このたび、流域松代幹線系花の丸汚水準幹線工事に伴い、記録保存を目的とした松代城跡の発掘確認調査を実施しました。ここに長野市の埋蔵文化財第124集として刊行いたします本書には、調査によって得られた遺跡の詳細を掲載しております。調査成果は、連続と継られてきた松代の歴史のほんの一部にすぎませんが、地域史解明の一助としてお役立ていただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力、ならびに発掘調査に際して多大なご尽力を賜りました近隣住民の皆様、当該工事の施工を請け負われた建設業関係者、そして報告書刊行に至るまでご支援、ご指導を賜りました関係機関・諸氏に厚く御礼申し上げます。

平成21年3月

長野市教育委員会
教育長 立岩 睦 秀

例 言

- 1 本書は、長野市松代町松代における開発事業「流域松代幹線系花の丸汚水準幹線工事」にともなう埋蔵文化財松代城跡の確認調査報告書である。
- 2 調査は、長野市水道局下水道建設課長からの依頼により長野市教育委員会（文化財課埋蔵文化財センター）が実施した。
- 3 発掘調査地は長野市松代町松代16～47、265～277地先（市道松代西23・24・25・26・27・28・29・30号線）に位置する。
- 4 調査は遺跡の記録保存を目的とするが、起因事業である下水道管布設工事の掘削幅が狭いため、施工掘削時に当センター職員が立会い、随時埋蔵文化財の遺存状況を確認すると共に、堆積土層や検出遺構について、適宜図化・写真撮影等の記録保存をはかる保護措置がとられた。
- 5 調査期間は平成20年5月12日から9月18日、調査面積は1,060㎡である。
- 6 遺跡の測量は、株式会社写真測図研究所に委託した。遺構中の座標・標高は、平面直角座標系の第Ⅵ系座標値（日本測地系2000）と、日本水準点の標高に基づく。
- 7 現場における遺跡の確認調査は、青木の指導のもと宿野が担当し、塚原・小林（由）が補助した。整理調査および本書の編集は、宿野・小林（由）が担当し、各調査員・作業員が作業を分担した。本書の執筆においては、第Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ章を宿野が、第Ⅲ章を小林が分担して執筆した。
- 8 遺跡から出土した遺物は、遺跡の略番号「MSCG」を用いて注記を行い、遺構図版類とともに長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目 次

序	
例言	
目次	
第I章 調査と経過	1
第1節 発掘調査に至る経過	
第2節 調査体制	
第3節 調査日誌抄	
第II章 遺跡の立地と環境	4
第1節 歴史的環境	
第2節 松代城の歴史概要	
第III章 調査成果	7
第1節 調査の方法	
第2節 調査の概要	
第3節 出土遺物の概要	
第IV章 結語	27
第1節 花の丸御殿の推定位置	

図 版 目 次

図1 松代城跡位置図	1	図8 Ⅲ区遺構調査図(1)	13
図2 松代城跡周辺遺跡分布図	4	図9 Ⅲ区遺構調査図(2)	14
図3 松代城縄張想定図	6	図10 Ⅱ区出土遺物(Ⅱ-①区)	19
図4 調査区分図	7	図11 Ⅱ区出土遺物(Ⅱ-①区)	20
図5 調査区全体図	10	図12 Ⅱ・Ⅲ区出土遺物	21
図6 I区遺構調査図	11	図13 花の丸御殿推定図	28
図7 Ⅱ区遺構調査図	12		

第I章 調査と経過

第1節 発掘調査に至る経過

開発予定地は、市道松代西23・24・25・26・27・28・29・30号線に位置する。同地は、松代城跡花の丸周辺に位置し、「松代城跡整備実施計画」の整備方針において、「史跡指定範囲外の旧城郭城についても指定地を拡大・公有化し、保存活用をはかる」区域にあたり、「新御殿跡整備基本計画書」においては平成19年度より公有地化を進める「第一次史跡拡大区域」に該当する。平成17年以降、史跡の保存整備担当部局である教育委員会文化財課が、花の丸における下水道建設事業・排水路改修工事の事業主体である水道局下水道建設課・建設部河川課と保護協議を重ねたが、現段階では史跡指定地拡大（公有地化）の早急な事業実施が困難な状況であり、住民の生活権を保護する観点から、下水道等建設事業実施の政策判断がなされた。そのため、工事に伴い記録保存として埋蔵文化財発掘調査を実施することとなった。埋蔵文化財センターでは、一連の協議経過を受け、先行して実施される下水道建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査についての保護協議を進めた。平成19年12月13日には、文化財保護法第94条第1項の規定による「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知書」が提出され、平成20年2月6日付け19教文第19-226号にて長野県教育委員会教育長より記録保存のための発掘調査実施の通知がなされる。平成20年2月29日に「埋蔵文化財発掘調査依頼書」、「土地所有者の承諾書」を受領し、埋蔵文化財発掘調査の実施に至った。調査は工事掘削に伴い、平成20年5月12日から9月18日までの130日間に渡って断続的に実施され、調査面積は1,060㎡に及んだ。

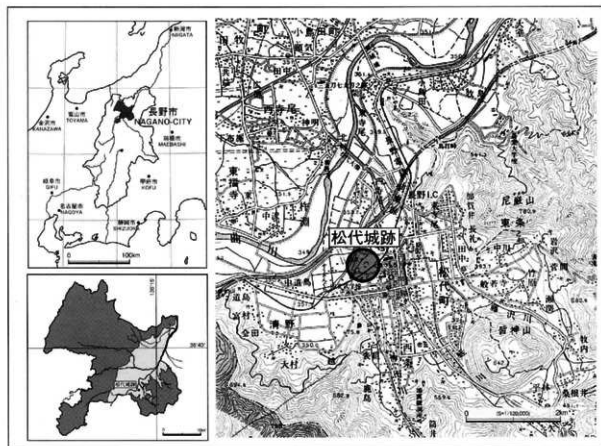


図1 松代城跡位置図

第2節 調査体制

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	立岩 睦秀	
総括管理者	文化財課	課長	雨宮 一雄	
総括責任者	埋蔵文化財センター	所長	青木 和明	
庶務担当		係長	宮澤 和雄、職員 吉村 久江	
調査担当		主査	小林 和子	
		主事	宿野 隆史（調査・編集担当） 塚原 秀之（調査担当）	
		専門員	遠藤恵実子、山野井智子、柴田 洋孝、 向山 純子、小林 由実（調査・編集担当）、 小山 夏奈、西澤 高敏	
整理調査員	青木善子、池田寛子、鳥羽徳子、中殿章子、武藤信子			
整理作業員	倉島敬子、小泉ひろ美、清水さゆり、関崎文子、富田景子、西尾千枝、 三好明子、村松正子			
測量業務委託	株式会社写真測量研究所			

発掘調査および整理調査を通じて、下記の方々、関係機関より数多くの貴重なご指導・ご助力を賜った。

調査協力者	長野市教育委員会文化財課	係長	飯島 哲也、	専門員	海野 修
	松代文化施設等管理事務所	係長	原田 和彦、	主事	松下 愛
	長野市立博物館	係長	降旗 浩樹		



「曲大直小園」（真田宝物館所蔵）

第3節 調査日誌抄

2008(平成20)年

- 3月10日 調査区全体測量開始
- 3月31日 調査区全体測量完了
- 5月12日 I区確認調査開始
- 5月31日 I区確認調査終了
- 6月2日 II-①区確認調査開始
- 6月11日 外堀石垣検出(II-①区)
- 6月12日 II-①区確認調査終了
- 6月25日 III-②区確認調査開始
- 7月2日 III-②区確認調査一部完了
- 7月8日 II-②区確認調査開始
- 7月10日 II-②区確認調査一部完了
- 7月14日 III-①区確認調査開始
- 7月18日 III-①区確認調査一部完了
- 7月22日 II-②区確認調査再開
- 7月25日 II-②区確認調査終了
- 7月30日 II-③区確認調査開始
- 8月8日 II-③区確認調査終了
- 8月11日 III-①区確認調査再開
- 8月20日 III-①区確認調査終了
- 8月22日 III-②区確認調査再開
- 8月25日 III-②区確認調査終了
- 8月27日 III-③区確認調査開始
- 9月18日 III-③区確認調査完了、現場における作業を終了する。



工事状況



調査状況

○調査工程表

調査区	詳細	2008(平成20)年							調査日数	調査面積	
		3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月			
全体	測量	■									
I区				■						20日間	240mf
II区	II-①区			■						11日間	
	II-②区					■	■			7日間	
	II-③区							■		10日間	
III区	III-①区					■		■		15日間	480mf
	III-②区				■			■		14日間	
	III-③区							■		23日間	

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 歴史的環境

歴史的環境 真田10万石の城下町である松代町は、背後に母袋山（標高977.5m）、高遠山（標高1208m）、奇妙山（標高1529.1m）などの東部山地を控え、神田川・鮎川・藤沢川などによって形成された複合扇状地上に位置している。扇端部は非常に緩やかな傾斜で、上記の3河川は天井川となって千曲川氾濫原に接している。千曲川の自然堤防上には、東寺尾の松原遺跡や清野の四ツ屋遺跡など弥生時代中～後期の拠点集落が存在し、平安時代まで継続することが確認されている。また扇状地の扇尖部には、中条遺跡や屋地遺跡などの古墳時代中～後期を主とする小規模な集落が存在し、周囲の山地からは古墳時代中期の大型円墳や前方後円墳、後期の群集墳などが確認されている。また山頂部には、尼飾城跡、寺尾城跡などの中世山城も多数分布している。



- 1 西原山古墳
- 2 磐神山古墳
- 3 磐神山古墳
- 4 磐神山古墳
- 5 磐神山古墳
- 6 磐神山古墳
- 7 磐神山古墳
- 8 磐神山古墳
- 9 磐神山古墳
- 10 磐神山古墳
- 11 磐神山古墳
- 12 磐神山古墳
- 13 磐神山古墳
- 14 磐神山古墳
- 15 磐神山古墳
- 16 磐神山古墳
- 17 磐神山古墳
- 18 磐神山古墳
- 19 磐神山古墳
- 20 磐神山古墳
- 21 磐神山古墳
- 22 磐神山古墳
- 23 磐神山古墳
- 24 磐神山古墳
- 25 磐神山古墳
- 26 磐神山古墳
- 27 磐神山古墳
- 28 磐神山古墳
- 29 磐神山古墳
- 30 磐神山古墳
- 31 磐神山古墳
- 32 磐神山古墳
- 33 磐神山古墳
- 34 磐神山古墳
- 35 磐神山古墳
- 36 磐神山古墳
- 37 磐神山古墳
- 38 磐神山古墳
- 39 磐神山古墳
- 40 磐神山古墳
- 41 磐神山古墳
- 42 磐神山古墳
- 43 磐神山古墳
- 44 磐神山古墳

図2 松代城跡周辺遺跡分布図

第2節 松代城の歴史概要

松代城(海津城)の築城 松代城は、甲斐の武田信玄(晴信)と越後の上杉謙信(長尾景虎)による「川中島の合戦」(1553~1564)の際に、武田側の北信濃攻略の前進基地として築城された海津城がはじまりとされる。永禄3年(1560)9月23日付けの武田信玄印判状には、武田家家臣の内田監物の「海津在城」が記されており、その頃にはほぼ完成しており在城衆が詰めていたことがうかがえる。築城当初の海津城については、『甲陽軍鑑』や『真武内伝』など後世の編纂物に記述がある一方、当時の古文書・絵図等の記録は無いため、詳細は定かではない。

石垣築造と城の改名 慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いの後、徳川幕府のもと全国的な規模で城の整備が行われる中、海津城には森長可の弟の森忠政が入り、二の丸・三の丸の整備が行われたと伝えられる。この頃本丸土塁が石垣に築造し直されたと考えられているが、石垣の整備については須田満親の時とも田丸直昌の時ともいわれており、定かではない。また、森忠政は、兄の旧領地であり、遠恨の地でもある川中島を希望して拝願しており、「百姓共我を待らん」として城名を「海津城」から「待城」に改めたと伝えられる。しかし、その「待城」の名も、松平忠輝が城主として入った慶長8年(1603)には名前の一文字をとって「松城」と改められた。城は松平忠輝の改易後、松平忠昌、酒井忠勝の居城となり、元和8年(1622)8月に真田信之が上田から移封された。この時から明治の廃城までの約250年間、松代藩を治めた真田氏が「松代城」を居城とした。現在の国史跡指定名称である「松代城」に城名が改められたのは、正徳元年(1711)、松代藩真田家3代藩主幸進の時といわれる。

寛保の洪水と千曲川の潮瀬 松代城は、本丸北側が千曲川に接していることもあり、たびたび洪水による被害を受けた。中でも、寛保2年(1742)、5代藩主信安の時の大洪水は戊の満水とよばれ、石垣、橋、堀の崩落、堀の埋没等甚大な被害報告がなされている。同年11月付けの修復願絵図(『信濃国川中島松代城石垣築直渠復元願絵図』)では、それぞれの被害箇所修復を願い出るとともに、堀の浅深についても併記されている。また、城内での被害も甚大で各地に史料が残っている。6代幸弘は、この洪水の後、千曲川の河道を北方へ移すため、大きく2度にわたって普請を行なった。この大普請は明和7年(1770)頃には完了していたようであるが、これと前後して御殿を本丸から花の丸へ移すこととなる。

花の丸御殿の造営 三の丸西側に位置する花の丸では、享保の火災以後居宅として利用されていたとみられる。寛保の水害後、文暦年間にはたたみ置きなどに使用されるが、御殿の普請は明和5年(1767)から始まり明和7年(1770)には完了する。以後廃城まで、政務の場、藩主の居住の場として本丸御殿に代わって花の丸御殿が利用されることとなる。花の丸御殿は、嘉永6年(1853)9代幸教の時、失火により焼失する。安政元年(1854)には再建されたが、裏向までの再建にはもう8年の歳月を要し、万延元年(1860)によりやく完成した。

明治初年の松代城 明治2年(1869)の版籍奉還後、真田幸民が松代藩知事に任命され花の丸御殿が藩庁舎となるが、城地は軍事的施設としての機能を失っていった。真田家文書の「御城地御処分之事」には、本丸・二の丸の畑地としての利用や堀の撤去、石垣や土塁の保存など十箇条が記されており、当時の城地利用方法が伺える。花の丸は、明治4年(1871)の廃藩置県により松代県庁となるが、放火によって明治6年(1873)には焼失している。明治8年(1875)に城地が家禄奉還の士族等に払い下げとなると、土塁の削平や堀の埋め立てが進んだとみられ、城地全体が桑畑として利用されるようになった。

本丸跡地の保存と整備 城跡の状況を嘆いた真田家は、明治19年(1886)以降、本丸跡地の買収につとめ、明治33年(1900)までに本丸の全域を取得した。その後松代城跡の本丸は、明治37年(1904)に遊園地として一般開放されるようになった。その際、町民ら有志によって本丸内や石垣上に松や桜などが植えられ、桜の名所とし

で知られるようになっていった。城地の本丸部分は、昭和39年（1964）に県の史跡になり、さらに昭和56年（1981）には旧城郭城の一部と新御殿を加えて国史跡の指定を受けるに至った。一方、花の丸については、宅地化の進行によって城郭景観が失われており、史跡指定範囲の拡大および埋蔵文化財の保全をはかることが求められている。

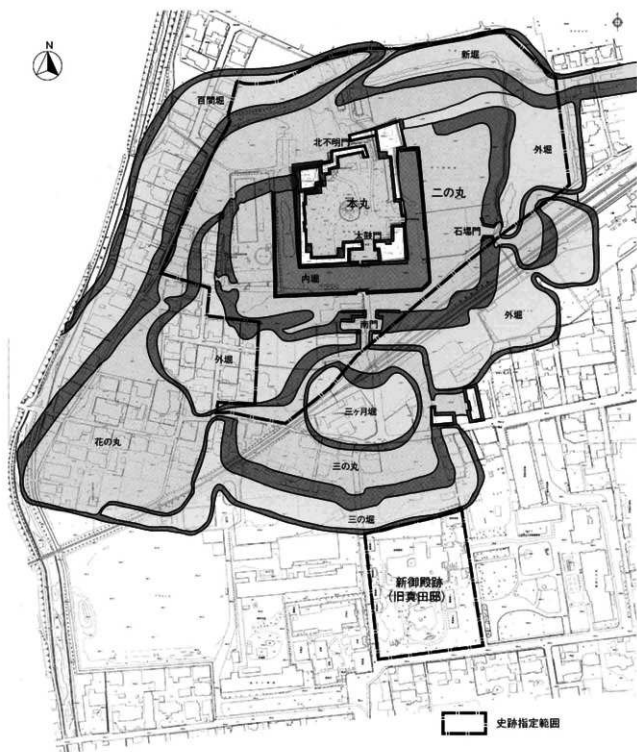


図3 松代城縄張想定図

第三章 調査成果

第1節 調査の方法

調査は平成20年5月12日より9月18日までの130日間にわたって実施した。調査にあたっては、施工範囲が幅1.5～2mと狭小であることから、①重機掘削、②埋蔵文化財遺構確認、③下水道管布設の順で施工と同時並行して確認調査を進めることとし、地積土層の断面確認を主目的とした。地積土層断面は、3～5mごとにセクションポイント（SP）を設けており、本調査では116地点で計測をしている。また、石垣等遺構検出においては、別途立面図等を作成している。

調査地は、既存道路の広範囲にわたっているため、便宜上調査区を3区に区分する。Ⅰ区は調査地西端の北東の軸を有する道路であり、花の丸外延部あるいは百間堀の土塁想定ラインにほぼ並行するものと思われる。Ⅱ区は花の丸北東の外堀想定地に位置し、堀想定範囲は周囲よりも1m以上低い窪地であることが視認できる。Ⅲ区は三の丸から花の丸へと続く道路であり、基本的に江戸期の花の丸曲輪内に該当する。なお、調査にあたっては事前に道路両肩約2m毎に測量点を落とし、検出遺構及びセクションポイントの基準とした。

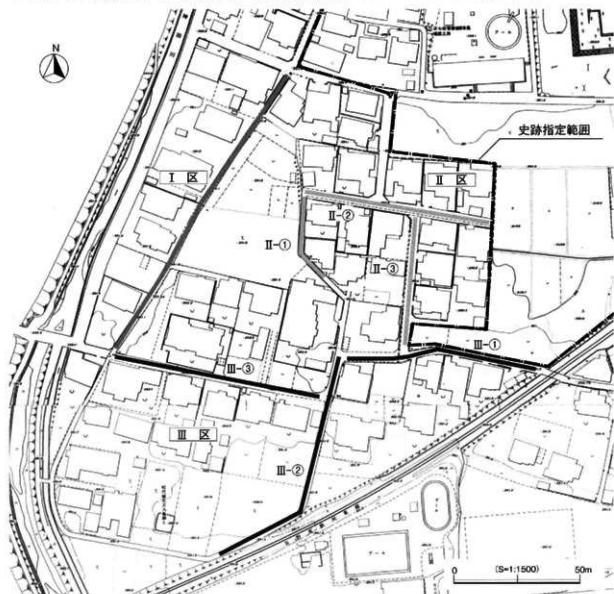


図4 調査区分図

第2節 調査の概要

(1) 全体概要

調査概要 松代城跡は昭和60年度から史跡環境整備事業の一環として発掘調査が実施されており、これまでに調査成果や絵図史料から城郭の細張りが想定されている。調査地は、松代城跡の南西部にあたり、旧城郭城の花の丸およびその周辺に位置する。調査は既存道路内への下水道管理設工事であるため、道路路盤工や既存埋設管などによって遺構の大部分が消失しているものと予測されていた。調査では、既存埋設管による攪乱も一部確認されるものの、比較的良好な状態で城郭遺構を確認することができた。今回の調査では、花の丸御殿礎石、外堀石垣など、これまで確認されていない新たな遺構を検出することができ、宅地化している現況においても埋蔵文化財が良好に遺存していることが判明した。以下、調査区毎に検出遺構の概要を示す。

(2) I区の調査概要

二の丸北西土塁 本調査区西端に位置するI区では、建物遺構等は確認されていない。堆積土層は、近代改変が現地地表下1.2~1.3mまで及んでいるものの、その下層には均質な褐色砂層が堆積する。この褐色砂層は、百間堀と接する松代城跡二の丸北西土塁（水除け土手）基底部において確認されている砂層と類似しており、百間堀と接する土塁もしくは旧千曲川河川敷の自然堤防堆積砂と推定される。また調査区中央部のSP2・SP7では、褐色砂層が西側へ落ち込む状況を確認しており、百間堀および旧千曲川へと落ち込む部位と推定される。

花の丸曲輪との境界 調査区中央よりやや南よりのSP12では、地表下約140cmの最下層から灰褐色や赤褐色の粘土ブロックを多量に含む土層が堆積する状況が確認された。またSP15では地表下60cmから暗褐色土が堆積しており、SP12を境に大きく堆積土層が異なる状況が看取できる。このことから、SP12付近は百間堀に接する水除け土手と花の丸曲輪との境界地点であるとともに、花の丸の曲輪造成時に人為的な盛土が施されている状況が推察される。

(3) II区の調査概要

II区の概要 本調査区は、ほぼ全域が松代城跡の外堀に位置しており、堀想定範囲内の地表面は、周囲よりも約1~2m低い窪地状の地形を呈している。調査・施工は、大きく3区分して実施された。II-①区は、東側に大きく下がる地形変換点上を南北に走る道路であり、外堀接岸部にあたる想定される。II-②区は周囲より約2m程低い地形を東西に横断しており、外堀中央部にあたると思われる。II-③区はII-②区の中央より南に延びる調査区であるが、地形は南に向けて徐々に高くなっており、調査区の北端と南端とは、約1.2mの高低差が認められることから、調査区南端は花の丸曲輪部と想定される。堆積土層は、外堀想定部では現地地表下約1mまで近代の改変を受けており、その下層は多量の泥炭を含む堀堆積土となる一方、花の丸曲輪想定部では褐色の盛土が確認される。堀の護岸部では、木杭や石垣の一部が検出されている。

検出された石垣 幕末の城内を描いた「海津城内真景図」では、外堀のうち花の丸御殿との接岸部のみに石垣が描かれており、調査でもII-①区の南端において高さ約1.2mの石垣を検出した。検出された石垣は、北に面を有し、外堀と直交する形状を示すが、嘉永4年（1851）の「曲大直小図」においては、同位置に花の丸御殿庭園の泉水とつながる水路が描かれており、検出された石垣はこの水路導入部の御殿側の岸部にあたるものと想定される。石垣内部の盛土からは17世紀末~18世紀末に比定される肥前系の陶磁器が出土していることから、明和

年間の花の丸御殿造営にあわせて本石垣が構築された可能性が推察される。またⅡ-③区の南端においても、石積み遺構が確認されているが、こちらは盛土内の出土陶磁器から、明治期以降の石積みと判断される。ただし、堆積土層はこの石積みを境界として大きく異なり、北側が堀堆積層であるのに対し、南側では盛土層となる。また石積みより3.9m北部において護岸用木杭を検出していることから、旧花の丸曲輪の接岸部が、この近代石積みの周辺であった可能性は高い。

(4) Ⅲ区の調査概要

Ⅲ区の概要 本調査区は、花の丸曲輪想定地を縦横断しており、Ⅱ-③区と接して花の丸曲輪から三の丸曲輪までの東西に延びるⅢ-①区、Ⅲ-①区西端より南に延びるⅢ-②区、Ⅲ-②区の中央や北よりから西に延びるⅢ-③区に区分できる。Ⅲ-①区の西側では現地表下約60cmより黒褐色や灰白色の粘土ブロックが混じる褐色粘性土が確認できる。この粘性土は、これまでの調査で確認されている松代城跡二の丸土塁の構築盛土と類似しており、人為的に盛土・造成したものと判断できる。盛土は花の丸曲輪の東端部まで確認されることから、千曲川の自然堤防を基盤として利用しながら、自然堤防東側に盛土をし、花の丸・三の丸の曲輪を形成した状況が推察される。

三の堀と外堀 Ⅲ-①区西部では、調査区南壁において多量の炭化物を包含する焼土層が、東西幅約10mの範囲にわたって厚く堆積している状況が確認された。この地点は、明治7年(1874)に記された「花ノ丸御殿地下地割図」と比較すると、外堀南端部に近接するものと思われる。江戸時代に描かれた縄張図では、三の丸と花の丸とを結ぶ通路は細く、三の堀と外堀によって筋違いの形状を呈していることから、幕末から明治初期の火災後に外堀の一部を埋め立てた状況が推測される。また、Ⅲ-②区南端部では盛土および流土は確認されず、堆積土層は近代造成土のみとなるが、この近代造成土より北のSP56・SP57では石積状の石材が検出されている。この調査成果を「花ノ丸御殿地下地割図」と比較すると、調査地点は水堀の位置にあたり、花の丸東部を囲む三の堀の一部と推察される。三の堀は鉄道線路によって南北に分断されており、堀の形状を留めていないことから、敷地払い下げ後の比較的早い段階で埋没した可能性が考えられる。

建物礎石 Ⅲ-②・③区では、1辺30~50cm、厚さ20cm程度の建物礎石と想定される石材が複数検出されている。礎石は現地表下110cm前後に集中しているものの、現地表下60cm前後でも確認されている。Ⅲ-②区ではSP43,48,53,54地点において、またⅢ-③区では、SP95,97,99,102地点において礎石状の石材が検出された。礎石は自然石および一部加工石材を使用しており、上面に平坦面を有している。堆積土層からは、現地表下60~70cmと100~110cmに炭化物を多量に含む焼土層を確認しており、現地表下110cm前後に検出される礎石は、焼土層に覆われている。花の丸の火災記録から、下層を嘉永6年(1853)の火災、上層を明治6年(1873)の火災にとりまわす整地層と想定されるが、出土遺物が少なく推測の域を出ない。これらの調査成果に万延元年(1860)の「花之丸御殿向御普請図」を重ねると、礎石位置は御殿の建物範囲とほぼ一致することから、花の丸御殿の建物礎石と推察される。

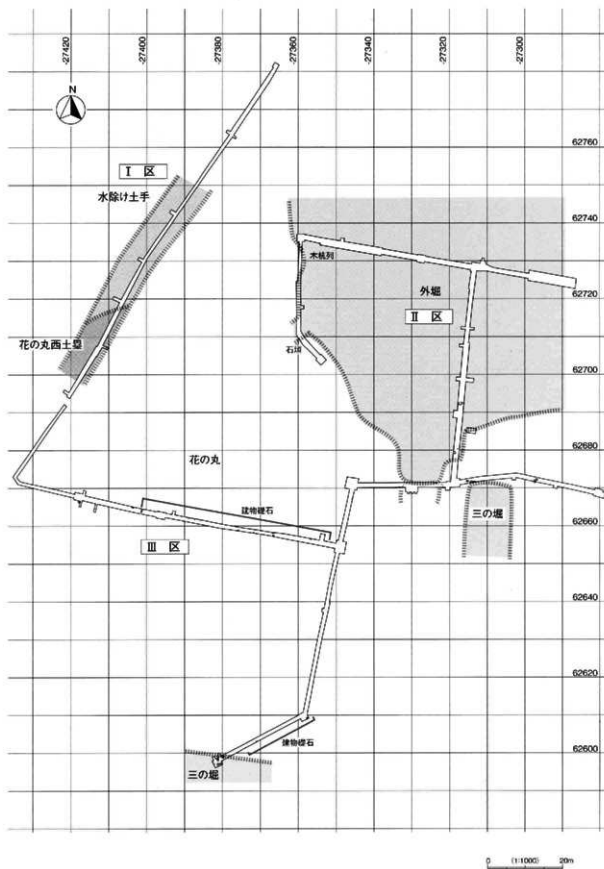
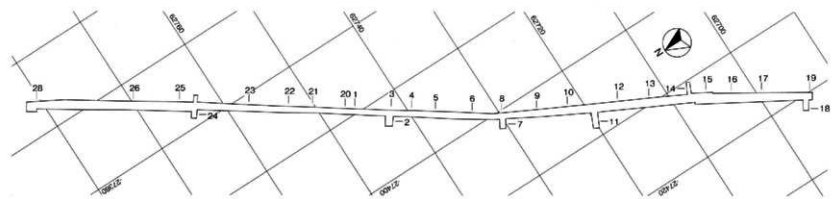
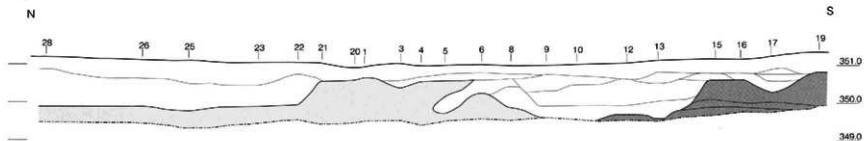


図5 調査区全体図

図 9 I 区調査結果



I 区調査平面図

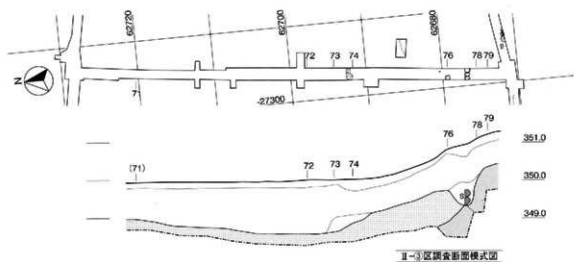
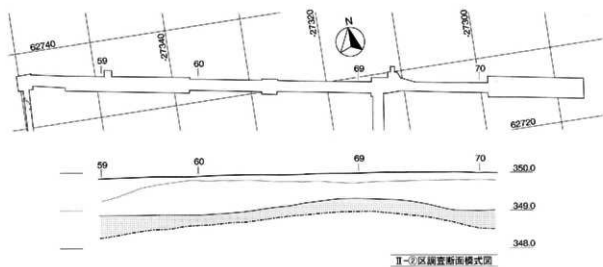
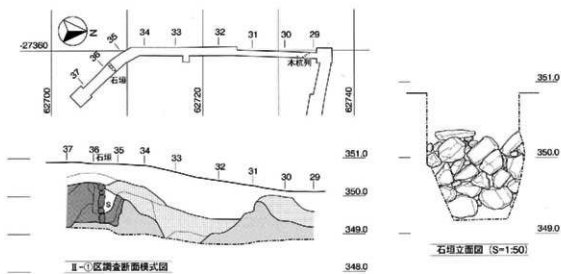


- 盛土
- 自然増積土
- 焼土
- 塚増積土

I 区調査断面模式図

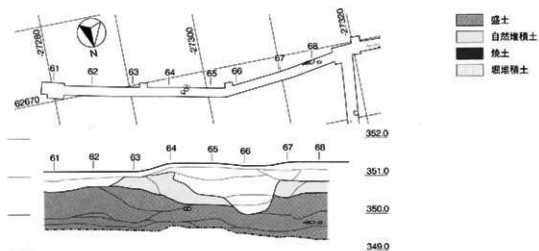
S=1:500 (平面・断面横) . 1:100 (断面縦)

番号はセクションポイント (SP) を示す

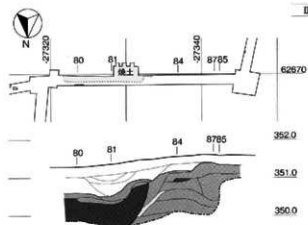


S-1: 500 (平面·断面横), 1: 100 (断面纵)

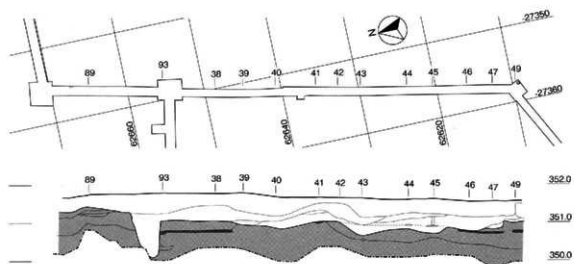
图7 II区遺構調査図



III-1区 (東部) 調査断面模式図



III-1区 (西部) 調査断面模式図

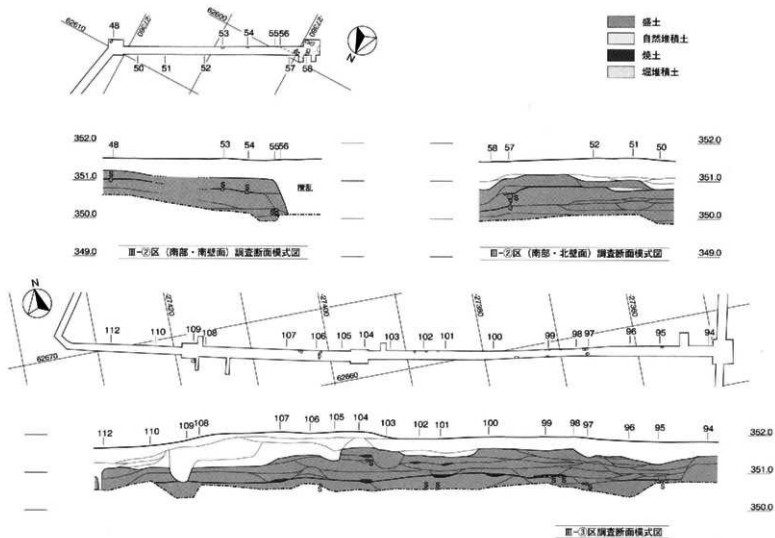


III-2区 (北部) 調査断面模式図

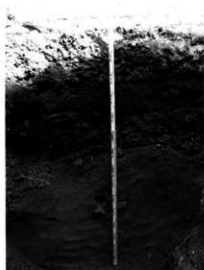
S=1:500 (平面・断面横), 1:100 (断面縦)

図8 III区遺構調査図(1)

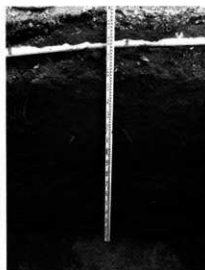
图9 Ⅲ区填槽调查图2



S=1:500 (平面·断面横), 1:100 (断面纵)



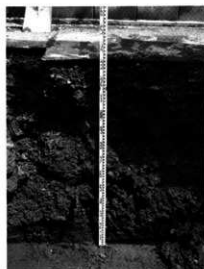
SP3 (I区)



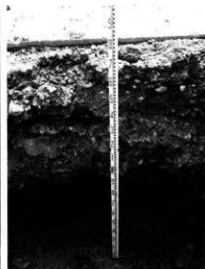
SP15 (I区)



SP34 (II-0区)



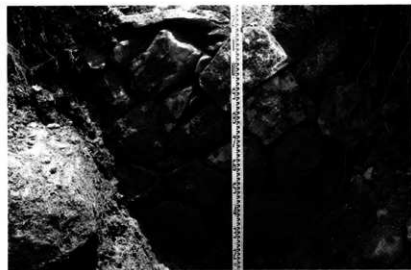
SP60 (II-2区)



SP74 (II-3区)



木杭列 (II-0区)



石垣 (II-0区)



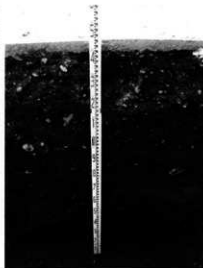
石積 (II-3区)



SP62 (III-1区)



SP67 (III-1区)



SP80 (III-1区)



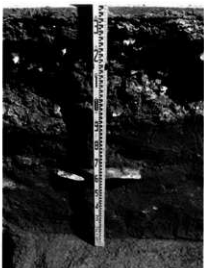
SP43 (III-2区)



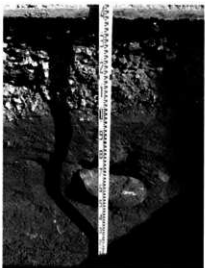
SP48 (III-2区)



SP51 (III-2区)



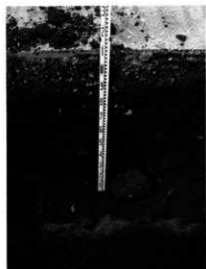
SP53 (III-2区)



SP54 (III-2区)



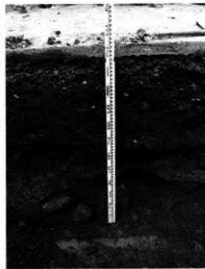
SP55 (III-2区)



SP95 (Ⅲ-③区)



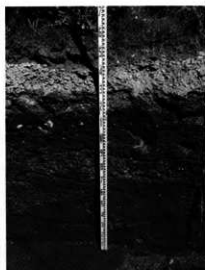
SP97 (Ⅲ-③区)



SP99 (Ⅲ-③区)



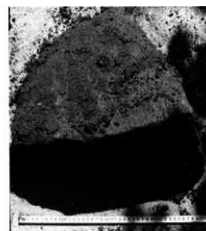
SP101 (Ⅲ-③区)



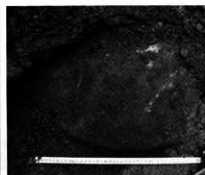
SP107 (Ⅲ-③区)



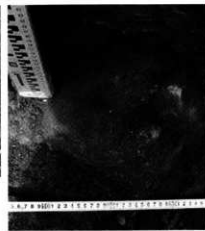
SP112 (Ⅲ-③区)



礎石 (Ⅲ-②区 SP53)



礎石 (Ⅲ-③区 SP97)



礎石 (Ⅲ-③区 SP102)

第3節 出土遺物の概要

(1) 陶磁器・土器

全体概要 全体的に小破片が多数を占めており、完形もしくはそれに近い個体の出土は見られない。破片も、Ⅱ-①区のみ集中して出土したが、多くは確らに出土が確認されるのみであった。年代は18世紀末から19世紀にかけての肥前系磁器、瀬戸美濃系陶磁器が主体となるが、19世紀前半に生産を開始した松代焼製品も散見される。器種は磁器の碗・皿・鉢、陶器の碗・皿・鉢類、焰器播鉢などの日常雑器が中心である。以下、地区毎に出土陶磁器の詳細を述べる。

Ⅰ区出土の陶磁器 出土点数が、他の調査区と比べて圧倒的に少ない。また、出土遺物の多数は既設管理土中であり、直接遺構に伴う資料ではない。特徴的なものとしては、弥生時代中期の甕の破片が1点出土しており、田子曲川上流の自然堤防上に存在する弥生期の集落遺跡の遺物が混入したものと想定される。

Ⅱ区出土の陶磁器 Ⅱ-①区は全調査区の中で、最も出土点数が多い一方、Ⅱ-②区では出土遺物は確認されていない。またⅡ-③区では調査区南端の石積み周辺から明治期以降のものを主体に出土している。Ⅱ-①区は出土陶磁器は肥前系磁器や瀬戸美濃系陶磁器が主体をなし、概ね18世紀末から19世紀以降に比定される。1・2・5は瀬戸美濃系の碗、3・6～10は肥前系の碗・蓋・皿である。11は瀬戸美濃系の馬の目皿であり、高台内には墨書の一部が確認できる。12の陶器播鉢は生産地不明だが、高台内まで鉄軸を施す。13・14の火鉢、15の播鉢は松代焼の製品である。また外堀石垣の盛土中より出土した肥前系磁器碗は、コンニャク印判による松文を施しており、17世紀末から18世紀末に比定される。16・17は肥前系の播鉢であり、生産年代は18世紀中頃から19世紀後半に比定される。18は在地系の焙烙だが、小破片のため内耳の有無は不明である。19は軒棧瓦であり、軒丸部に結び金文を、軒平部に山形文を施す。この他にも多数の瓦破片が出土している。Ⅱ-①区は外堀の接岸部にあたると思われるため、花の丸曲輪で使用された陶磁器・瓦が堀に廃棄された状況が推察されるが、被熱した陶磁器等、花の丸御殿の焼失に関わる資料は確認されていない。一方、Ⅱ-③区では人工コバルトを用いた19世紀末以降所産の磁器が主体であり、20は銅版転写である。

Ⅲ区出土の陶磁器 Ⅲ-①区東側は既設管によって攪乱を受けているが、西側からは18世紀末から19世紀にかけての肥前系磁器、瀬戸美濃系陶磁器を主体に京・信楽系の碗(25)が出土している。Ⅲ-①区西側の焼土中からは六文銭軒丸瓦(27)が出土しているが、陶磁器の出土はわずかである。Ⅲ-②区では北半部では陶磁器の出土がわずかにみられるものの、南半部ではほとんど確認することができない。概ね19世紀前後の肥前系磁器、瀬戸美濃系陶磁器を主体とするが、いずれも小破片での出土にとどまっている。Ⅲ-③区は花の丸御殿中央部に位置するが、遺物の出土量は少なく、19世紀前後から明治期にかけての肥前系磁器、瀬戸美濃系陶磁器を主体としている。29・30は瀬戸美濃系の磁器碗であり、19世紀初頭以降に比定される。出土遺物は、検出された2層の焼土層の中間層および焼土層上層で出土していることから、これらの堆積土層は嘉永6年(1853)の火災および明治6年(1873)の火災後の整地層と判断される。ただし下層焼土層より下位では、出土遺物が確認されておらず、堆積土層の正確な時期を想定することは困難な状況である。また、Ⅲ-③区西側では、古墳時代後期の土師器甕および平安時代の坏が出土しており、花の丸造営以前において自然堤防上に集落が存在した可能性が想定される。

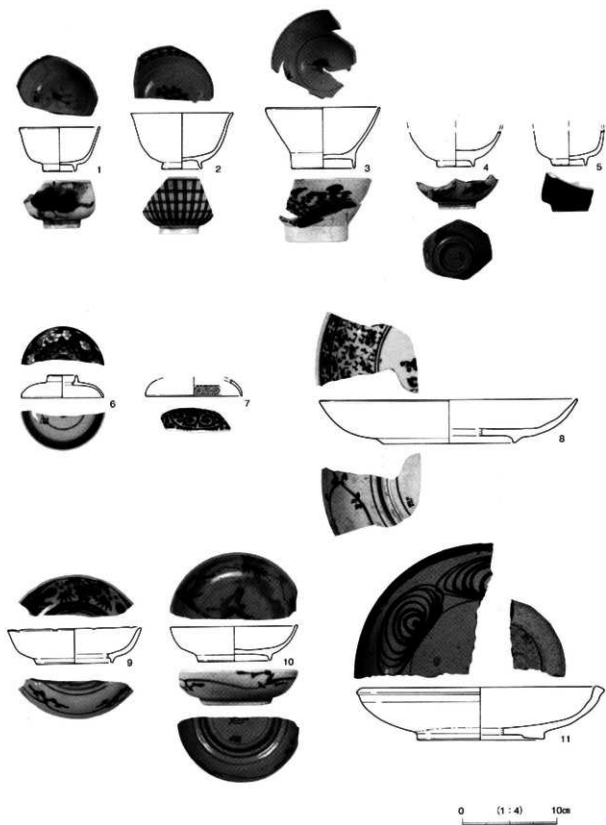


图10 II区出土遗物（II-①区）

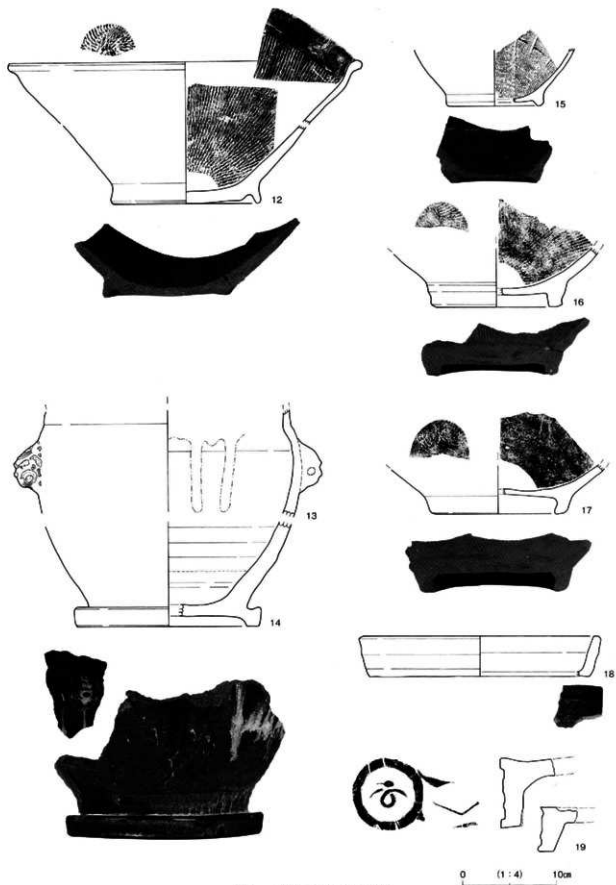
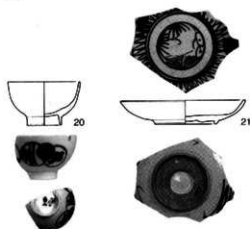
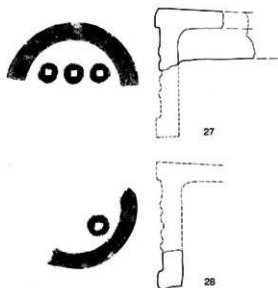
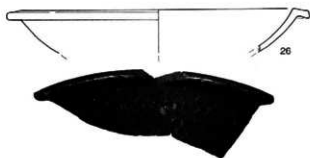
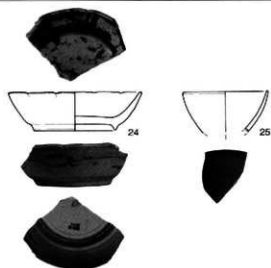
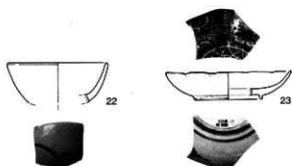


图11 II区出土遗物(II-①区)

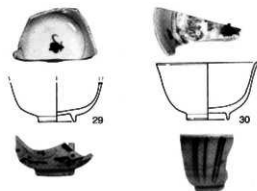
II-③区



II-①区



III-③区



0 (1:4) 10cm

图12 II·III区出土遗物 (II-③·II-①·III-③区)

遺物観察表

発掘番号	出土地点			種類	機能	法量 (cm)				文様・その他					所見							
	区	遺物番号	層位			形状	土色・特徴	成形技法	法量 (cm)				文様・その他									
									口徑	縦径	部径	重量 (g)	外面	内面		見込	高台内	特記事項	鑑定系	鑑定年代		
1	Ⅱ-①	19	不明	磁器	小瓶	扇反形	白	ロクロ	片張・透明釉	8.4	3.4	4.6	30	90%	大塚の おき子	陶織	文様あり	—	—	瀬戸系 遺品	1800-1800	
2	Ⅱ-①	34	不明	磁器	小瓶	扇反形	白	ロクロ	片張・透明釉	10.8	4.4	5.9	51	40%	徳子の おき子	陶織	文様あり	—	—	瀬戸系 遺品	1800-1800	
3	Ⅱ-①	6	瓶塚墳	磁器	中瓶	広底形	白	ロクロ	片張・透明釉	12.0	6.5	6.4	99	70%	山本 おき子	二本線	風流	—	—	肥前系	1700-1800	
4	Ⅱ-①	26	石川塚	磁器	中瓶	丸形	白灰	ロクロ	片張・透明釉	3.8	3.7	102	50%	90%	—	—	—	—	瀬戸系 遺品	1800-1800		
5	Ⅱ-①	5	瓶塚墳	磁器	小瓶	腰瓶形	白	ロクロ	片張・透明釉	3.4	3.7	32	40%	90%	—	—	—	—	肥前系	1800-1800		
6	Ⅱ-①	7	瓶塚墳	磁器	蓋	腰瓶形	白	ロクロ	片張・透明釉	8.8	3.0	2.4	36	40%	水屋 おき子	雲文	文様あり	—	—	肥前系	1750-1800	
7	Ⅱ-①	30	瓶塚墳	磁器	蓋	腰瓶形	白	ロクロ	片張・透明釉	10.0	3.7	4	8%	8%	徳子 おき子	西方文 字	—	—	肥前系	1800-1800		
8	Ⅱ-①	33	瓶塚墳	磁器	大皿	丸形	白	ロクロ	片張・透明釉	27.2	13.8	4.6	101	10%	徳子 おき子	西方文 字	文様あり	—	—	肥前系	1800-1800	
9	Ⅱ-①	23	瓶塚墳	磁器	小皿	梅花形	白	ロクロ	片張・透明釉	14.2	8.0	3.6	41	25%	徳子 おき子	西方文 字	文様あり	—	—	肥前系	1800-1800	
10	Ⅱ-①	28	不明	磁器	小皿	丸形	白	ロクロ	片張・透明釉	13.4	7.5	3.7	101	50%	徳子 おき子	西方文 字	文様あり	—	—	肥前系	1800-1800	
11	Ⅱ-①	19	不明	陶器	大皿	丸形	灰青	ロクロ	鉄軸・灰軸	26.2	13.4	5.5	264	25%	徳子 おき子	口縁に 鉄軸	—	—	—	肥前系	1800-1800	
12	Ⅱ-①	7	瓶塚墳	陶器	罐鉢	高台付	赤黒・土色 白灰・土色	ロクロ	鉄軸	26.6	15.6	15.0	806	47%	徳子 おき子	口縁に 鉄軸	—	—	—	肥前系	1800-1800	
13	Ⅱ-①	5	瓶塚墳	陶器	火鉢	風船形	赤黒・土色 白灰・土色	ロクロ	白磁・陶織	—	—	—	201	5%	徳子 おき子	口縁に 陶織	—	—	14上 同一 製	松代系	1600-	
14	Ⅱ-①	5	瓶塚墳	陶器	火鉢	風船形	赤黒・土色 白灰・土色	ロクロ	白磁・陶織	—	—	—	909	25%	徳子 おき子	口縁に 陶織	—	—	14上 同一 製	松代系	1600-	
15	Ⅱ-①	21	不明	磁器	罐鉢	高台付	緑茶・白磁子	ロクロ	鉄軸	9.8	6.8	111	20%	20%	徳子 おき子	—	—	—	—	肥前系	1800-	
16	Ⅱ-①	7	瓶塚墳	磁器	罐鉢	高台付	赤黒	ロクロ	鉄軸	14.0	8.1	374	25%	25%	徳子 おき子	—	—	—	—	肥前系	1700-1800	
17	Ⅱ-①	9	瓶塚墳	磁器	罐鉢	高台付	赤黒	ロクロ	鉄軸	14.0	6.1	440	20%	20%	徳子 おき子	—	—	—	—	肥前系	1700-1800	
18	Ⅱ-①	12	不明	土器	湯持	平底	焼	ロクロ	無施釉	24.6	22.4	4.3	34	6%	又又 おき子	—	—	—	—	内耳有 り	在地系	
20	Ⅱ-①	50	瓶塚墳	磁器	小瓶	丸形	白	ロクロ	片張・透明釉	7.8	3.6	4.6	43	45%	徳子 おき子	—	—	—	—	肥前系	1800-	
21	Ⅱ-①	49	瓶塚墳	磁器	小皿	丸形	白灰	ロクロ	片張・透明釉	13.2	6.3	2.5	162	50%	徳子 おき子	—	—	—	—	肥前系	1800-	
22	Ⅱ-①	57	二次堆積	磁器	小瓶	丸形	白灰	ロクロ	片張・透明釉	10.4	6.0	25	8%	8%	徳子 おき子	—	—	—	—	肥前系	1800-1700	
23	Ⅱ-①	54	不明	磁器	小皿	梅花形	白灰	ロクロ	片張・透明釉	13.4	7.2	2.9	33	15%	徳子 おき子	—	—	—	—	肥前系	1800-	
24	Ⅱ-①	56	不明	磁器	小皿	梅花形	白灰	ロクロ	片張・透明釉	14.2	8.6	4.0	97	25%	徳子 おき子	—	—	—	—	肥前系	1800-1700	
25	Ⅱ-①	57	二次堆積	陶器	小瓶	杉形	灰黄	ロクロ	灰軸	9.0	6.0	30	13%	13%	徳子 おき子	口縁に 鉄軸	—	—	—	大部分 欠損	宮・伊 東系	1700-1800
26	Ⅱ-①	55	二次堆積	陶器	大皿	薄底形	灰	ロクロ	鉄軸	32.0	14.0	154	10%	10%	徳子 おき子	口縁に 鉄軸	—	—	—	口縁部 欠損	肥前系	1800-
29	Ⅱ-①	43	二次堆積	磁器	小瓶	腰瓶形	白	ロクロ	片張・透明釉	8.0	6.0	61	47%	47%	徳子 おき子	—	—	—	—	肥前系	1800-	
30	Ⅱ-①	43	二次堆積	磁器	小瓶	扇反形	白	ロクロ	片張・透明釉	10.6	4.4	6.0	39	30%	徳子 おき子	二本線 陶織	文様あり	—	—	肥前系	1800-	

発掘番号	出土地点			種類	機能	法量 (cm)				文様・その他		所見
	区	遺物番号	層位			形状	縦径	横径	厚さ	重量 (g)	文様・その他	
19	Ⅱ-①	13	不明	瓦	軒瓦	7.3	16.5	2.3	417	丸部・筋 伊勢系	平部：山形文	
27	Ⅱ-①	53	不明	瓦	軒瓦			1.7-2.0	435	垂定様：13.5cm	六文銭	
28	Ⅱ-①	40	不明	瓦	軒瓦			2.0-2.6	453	垂定様：13.5cm	六文銭	

遺物観察表（実測対象外）

区	遺物番号	層位	出土状況				重量	調査			
			種別	器種分類	形状	胎土色特徴		成形技法	胎付箇所・ 練等	特記事項	調査地域
I	1	ホクワン	磁器	中皿	平形	白	ロク	透明釉	13	飯取板等、近代製品	800-
I	2	惣上?	他						18	養生土器 造	
I	3	ホクワン	瓦	平瓦					94		
I	4	ホクワン	磁器	碗	不明	白	ロク	信濃・透明釉	17	高台部分のみ	瀬戸・美濃 1800-
II-(1)	5	磁塚積	磁器	小瓶	平球形	白	ロク	信濃・透明釉	10	内底、底面中央	瀬戸・美濃 1800-
II-(1)	5	磁塚積	陶器	大鉢	不明	緑白/白赤	ロク	白濁・赤黒	1,148	内底、外縁部 内面、高台付・白濁	近代系 1800-
II-(1)	5	磁塚積	陶器	中皿	丸形	乳白	ロク	灰釉			
II-(1)	5	磁塚積	瓦	平瓦・丸瓦					9,170		
II-(1)	6	磁塚積	磁器	中皿	丸形	白	ロク	信濃・透明釉	81	内底、文様部 内面、高台	肥前系
II-(1)	6	磁塚積	磁器	中皿	平球形	白	ロク	信濃・透明釉		内底、文様部 乳白、底面中央付 白濁	肥前系 1700-
II-(1)	6	磁塚積	磁器	小皿	丸丸形	白	ロク	信濃・透明釉		内底、中央部	肥前系
II-(1)	6	磁塚積	磁器	中皿	丸形	白	ロク	信濃・透明釉		高台部分のみ	肥前系
II-(1)	6	磁塚積	陶器	大鉢	丸形	灰	ロク	信濃・透明釉	422	内底、中央部	近代系
II-(1)	6	磁塚積	陶器	器体	口縁玉縁部	緑白/白赤	ロク	白濁・赤黒		口縁・底中央上部	近代系 1800-
II-(1)	6	磁塚積	陶器	器体	把手下部?	黄白	ロク	灰釉・赤黒		内底、高台部 内面、高台付	瀬戸・美濃 1800-
II-(1)	6	磁塚積	陶器	中皿	丸形	乳白	ロク	灰釉・灰釉		口縁部、高台部分	1800-
II-(1)	7	磁塚積	磁器	中皿	丸形	白	ロク	信濃・透明釉	40	内底、高台部 内面、高台付	肥前系 1700-
II-(1)	7	磁塚積	磁器	中皿	不明	白	ロク	信濃・透明釉		内底、中央部 文様・口縁部内面、高台付	瀬戸・美濃 1800-
II-(1)	7	磁塚積	陶器	土瓶	輪盤玉形	乳白	ロク	灰釉	340	丸底中央部、輪盤部のみ	京・信楽系
II-(1)	7	磁塚積	陶器	土瓶	杉形	乳白	ロク	透明釉		高台部分のみ	京・信楽系 1700-
II-(1)	7	磁塚積	陶器	壺	不明	黄白	ロク	透明釉		口縁部・高台部分	
II-(1)	8	磁塚積	陶器	器体	不明	黄白・赤黒	ロク	灰釉	138	整理箱、口縁部	
II-(1)	11	磁塚積	陶器	小皿	杉形	灰白	ロク	透明釉	43	高台部分のみ	京・信楽系
II-(1)	11	磁塚積	陶器	鉢小皿	不明	赤黒	ロク	白濁・灰釉			
II-(1)	12	不明	陶器	器体	口縁玉縁部	緑白/白赤	ロク	灰釉	168	口縁部分のみ	近代系
II-(1)	13	不明	磁器	中皿	平球形	白	ロク	信濃・透明釉	32	内底、中央部	瀬戸・美濃 1800-
II-(1)	13	不明	磁器	中皿	丸形?	白	ロク	信濃・透明釉		内底、中央部	瀬戸・美濃 1800-
II-(1)	13	不明	陶器	中皿	圓縁部	乳白	ロク	内底、灰釉	185	内底、中央部	瀬戸・美濃 1800-
II-(1)	13	不明	陶器	小鉢	不明	乳白	ロク	白濁・灰釉		口縁部	
II-(1)	13	不明	陶器	壺	不明	黄白	ロク	透明釉	230		
II-(1)	14	磁塚積	瓦	平瓦							
II-(1)	15	磁塚積	磁器	中皿	不明	白	ロク	信濃・透明釉	17	内底・内面、文様部	肥前系
II-(1)	16	不明	磁器	鉢	不明	白	ロク	信濃・透明釉	22	内底、文様部	肥前系
II-(1)	16	不明	陶器	大鉢	輪盤形	緑白/白赤	ロク	白濁・灰釉	509	底中央部のみ	近代系 1800-
II-(1)	17	ホクワン	他	タイル						近代製品	
II-(1)	18	不明	土器	不明	半筒			灰釉	30		
II-(1)	18	不明	磁器	不明	半筒			灰釉	51		瀬戸・美濃 1800-
II-(1)	19	不明	磁器	小皿	不明	白	ロク	信濃・透明釉	79	内底、文様部	肥前系 1800-
II-(1)	19	不明	磁器	皿	不明	白	ロク	信濃・透明釉		「白濁部」の内面	肥前系
II-(1)	19	不明	磁器	皿	不明	白	ロク	信濃・透明釉		内底、中央部	肥前系
II-(1)	19	不明	磁器	小皿	丸形	白	ロク	信濃・透明釉		内底、中央部中央	瀬戸・美濃
II-(1)	19	不明	磁器	輪盤片等		白	ロク	信濃・透明釉		輪盤片	瀬戸・美濃
II-(1)	19	不明	陶器	中皿	丸形	灰	ロク	信濃・透明釉	536	内底、中央部 内面、高台部	肥前系
II-(1)	19	不明	陶器	大鉢	輪盤形	緑白/白赤	ロク	白濁・赤黒		口縁部、内面、高台付	近代系 1800-
II-(1)	19	不明	陶器	蓋	土蓋形	灰	ロク	白濁・灰釉・灰釉		中央部中央部	
II-(1)	19	不明	陶器	鉢木鉢	輪盤形輪盤部	乳白	ロク	灰釉		高台部分のみ	瀬戸・美濃 1800-
II-(1)	19	不明	陶器	中皿	輪盤形	灰黄	ロク	灰釉		瀬戸・美濃	
II-(1)	20	土器	磁器	仏教器	不明	灰白	ロク	信濃・透明釉	18	内底、高台部	肥前系 1800-
II-(1)	20	土器	磁器	網	不明	灰白	ロク	信濃・透明釉		内底、高台部 文様部	肥前系
II-(1)	21	不明	磁器	中皿	丸形	白	ロク	信濃・透明釉	125	内底、高台部 内面、文様部	肥前系
II-(1)	21	不明	磁器	大鉢	丸形	白	ロク	信濃・透明釉		口縁部・口縁部 高台部分	瀬戸・美濃 1800-
II-(1)	21	不明	瓦	平瓦					77		
II-(1)	21	不明	陶器	不明	半筒			灰釉	36		
II-(1)	22	不明	瓦	平瓦					133		
II-(1)	23	不明	磁器	皿	丸形	白	ロク	信濃・透明釉	13	底中央部 内底、中央部 内面、高台付	肥前系 1700-
II-(1)	23	不明	瓦	平瓦					58		
II-(1)	24	不明	磁器	碗	不明	白	ロク	信濃・透明釉	66	内底、中央部 内底、中央部	肥前系 1700-
II-(1)	24	不明	磁器	不明	不明	白	ロク	透明釉		瀬戸・美濃	1800-
II-(1)	25	不明	磁器	大鉢	丸形	白	ロク	信濃・透明釉	28	内底、高台部 内底、中央部	肥前系 1800-
II-(1)	27	不明	磁器	小皿	輪盤形	白	ロク	信濃・透明釉	111	内底、高台部中央部 内底、中央部	瀬戸・美濃 1800-
II-(1)	27	不明	磁器	小皿	不明	白	ロク	信濃・透明釉		内底、高台部中央部	肥前系
II-(1)	28	不明	陶器	大鉢	丸形	白	ロク	信濃・透明釉	40	内底、中央部 内底、中央部	肥前系 1800-
II-(1)	28	不明	磁器	皿	輪盤形	白	ロク	信濃・透明釉		内底、高台部 内底、中央部	瀬戸・美濃 1800-

基本属性		西 区									
区	建物 番号	種別	建物分類	形状	柱十色 特徴	成形色状	給付料・ 料率等	重量	特記事項	鑑定結果	鑑定 年代
Ⅱ-①	28	不明	海部	焼?	不明	灰黄	白タタ	灰輪	31	高田山のみ	
Ⅱ-①	28	不明	海部	不明		灰白	白タタ	灰輪・緑輪		大田山のみ	
Ⅱ-①	29	不明	塩部	不明(焼?)		白	白タタ?	灰輪・透明輪	4	大田山のみ	肥前系?
Ⅱ-①	30	築原積	海部	中級	踏込形	灰白	白タタ	灰輪	31	1,000坪のみ	肥前・美濃
Ⅱ-①	33	築原積	塩部	焼	不明	白	白タタ	灰輪・透明輪	91	不明	肥前系
Ⅱ-①	34	不明	塩部	中級	広葉形	白	白タタ	灰輪・透明輪	167	不明	肥前・美濃
Ⅱ-①	34	不明	塩部	中級	半球形	白	白タタ	灰輪・透明輪	167	不明	肥前・美濃
Ⅱ-①	34	不明	塩部	中級	半球形	白	白タタ	灰輪・透明輪		不明	肥前系
Ⅱ-①	34	不明	塩部	中級	半球形	白	白タタ	灰輪・透明輪		不明	肥前系
Ⅱ-①	34	不明	塩部	中級	半球形	白	白タタ	灰輪・透明輪		不明	肥前系
Ⅱ-①	34	不明	塩部	中級	半球形	白	白タタ	灰輪・透明輪		不明	肥前系
Ⅱ-①	34	不明	塩部	中級	半球形	白	白タタ	灰輪・透明輪		不明	肥前系
Ⅱ-①	34	不明	塩部	焼?	不明	白	白タタ	透明輪			
Ⅱ-①	34	不明	海部	中級	ペコ山形	灰	白タタ	灰輪	130	肥前系	肥前・美濃
Ⅱ-①	34	不明	海部	土版	算盤玉形	灰	白タタ	青輪		不明	肥前系?
Ⅱ-①	34	不明	海部	中級	高出彫形	灰白	白タタ	灰輪		不明	肥前・美濃
Ⅱ-①	34	不明	海部	焼	彫形	灰	白タタ	透明輪		不明	京・信濃系
Ⅱ-①	34	不明	海部	焼	不明	灰	白タタ	灰輪			
Ⅱ-①	34	不明	塩部	不明	不明	灰	白タタ	灰輪			
Ⅱ-①	36	不明	塩部	焼	不明	灰	白タタ	白泥・灰輪	12		
Ⅱ-①	36	不明	塩部	小輪	半球形	白	白タタ	灰輪・透明輪	86	肥前・美濃	肥前・美濃
Ⅱ-①	36	不明	塩部	小輪	半球形	白	白タタ	灰輪・透明輪		不明	肥前系
Ⅱ-①	36	不明	塩部	小輪	彫形	白	白タタ	灰輪・透明輪		不明	肥前・美濃
Ⅱ-①	36	不明	塩部	小輪	不明	白	白タタ	灰輪・透明輪		不明	肥前・美濃
Ⅱ-①	36	不明	塩部	小輪	彫形?	白	白タタ	透明輪		不明	肥前・美濃
Ⅱ-①	36	不明	塩部	焼	踏込形	白	白タタ	灰輪・透明輪		不明	肥前系
Ⅱ-①	36	不明	塩部	小輪	不明	白	白タタ	灰輪・透明輪		不明	肥前系
Ⅱ-①	36	不明	海部	鉢	口縁広彫形	灰輪・白タタ	白タタ	灰輪・緑輪	260	1,000坪のみ	肥前系
Ⅱ-①	36	不明	海部	鉢	口縁広彫形	灰輪・白タタ	白タタ	灰輪		1,000坪のみ	肥前系
Ⅱ-①	36	不明	海部	焼	口縁緑輪	灰	白タタ	灰輪			
Ⅱ-①	36	不明	海部	中級	彫形	灰白	白タタ	灰輪		高田山のみ	肥前・美濃
Ⅱ-①	36	不明	海部	中級	脚盤形	灰白	白タタ	灰輪		高田山のみ	肥前・美濃
Ⅱ-①	36	不明	海部	中級	不明	灰白	白タタ	灰輪		高田山のみ	肥前・美濃
Ⅱ-①	36	不明	海部	中級	彫形	灰	白タタ	灰輪		高田山のみ	肥前・美濃
Ⅱ-②	48	カタラン	惣	ザラス造等						不明	
Ⅱ-②	50	築原積	塩部	小輪	彫形	白	白タタ	透明輪	75	不明	
Ⅱ-②	50	築原積	塩部	酒杯	不明	白	白タタ	透明輪		不明	
Ⅱ-②	51	不明	塩部	小皿	輪彫形	白	白タタ	透明輪	51	不明	肥前系
Ⅱ-②	51	不明	塩部	中級	彫形	白	白タタ	灰輪・透明輪		不明	肥前・美濃
Ⅱ-②	51	不明	塩部	供養形	不明	白	白タタ	透明輪		不明	肥前・美濃
Ⅱ-②	52	盛上	海部	鉢	不明	灰	白タタ	白泥	60	不明	肥前系
Ⅱ-①	44	カタラン	包器	踏込	不明	黄褐色		灰輪	48	高田山のみ	
Ⅱ-①	54	不明	塩部	鉢	六角形?	白	白タタ	灰輪・透明輪	17	不明	肥前・美濃
Ⅱ-①	55	二次海積	塩部	小輪	不明	白	白タタ	灰輪・透明輪	43	不明	肥前・美濃
Ⅱ-①	55	二次海積	塩部	焼	不明	白	白タタ	灰輪・透明輪		不明	肥前・美濃
Ⅱ-①	55	二次海積	塩部	焼	踏込形	白	白タタ	灰輪・透明輪		不明	肥前・美濃
Ⅱ-①	55	二次海積	塩部	焼	踏込形	白	白タタ	灰輪・透明輪		不明	肥前・美濃
Ⅱ-②	39	盛上	惣						9	不明	
Ⅱ-②	40	カタラン	土器	不明					13	不明	
Ⅱ-②	41	不明	塩部	小輪	不明	白	白タタ	灰輪・透明輪	6	不明	肥前・美濃
Ⅱ-②	42	不明	瓦	平瓦					302	不明	
Ⅱ-②	58	二次海積	塩部	大皿	不明	白	白タタ	透明輪	70	高田山のみ	肥前系
Ⅱ-②	59	二次海積	海部	瓦	不明	灰	白タタ	灰輪	16	不明	肥前・美濃
Ⅱ-②	61	二次海積	塩部	小輪	彫形	白	白タタ	灰輪・透明輪	7	不明	肥前・美濃
Ⅱ-②	61	二次海積	海部	焼	不明	灰白	白タタ	灰輪	41	小輪形	肥前・美濃
Ⅱ-②	61	二次海積	海部	焼	踏込形	灰	白タタ	灰輪		不明	肥前・美濃
Ⅱ-②	62	二次海積	塩部	小輪	彫形	白	白タタ	灰輪・透明輪	22	不明	肥前系
Ⅱ-②	65	二次海積?	海部	焼	不明	灰	白タタ	灰輪	107	小輪形	肥前・美濃
Ⅱ-②	65	二次海積?	海部	中級	不明	白	白タタ	灰輪		不明	肥前・美濃
Ⅱ-②	65	二次海積?	海部	中級	浅彫形?	緑褐色	白タタ	白泥・灰輪		不明	肥前系
Ⅱ-②	67	二次海積	海部	裏小皿	不明	灰	白タタ	灰輪	14	不明	
Ⅱ-②	68	不明	塩部	小皿	彫形	白	白タタ	透明輪	23	不明	肥前・美濃
Ⅱ-②	69	カタラン	塩部	大皿	不明	白	白タタ	灰輪・透明輪	88	不明	肥前系
Ⅱ-②	70	二次海積	塩部	小皿	不明	灰白	白タタ	灰輪・透明輪	33	不明	肥前系
Ⅱ-②	70	二次海積	海部	土版	不明	灰黄	白タタ	灰輪	37	不明	京・信濃系
Ⅱ-②	70	二次海積	土器	不明	素焼				18		
Ⅱ-②	71	不明	塩部	小皿	不明	白	白タタ	透明輪	10	不明	肥前系
Ⅱ-②	71	不明	惣						11	古物	土器等
Ⅱ-②	73	自然海積	惣						48	古物	土器等
Ⅱ-②	75	自然海積	惣						29	平安	土器等
Ⅱ-②	76	自然海積	惣						20	不明	土器等



II区出土陶磁器



II区出土擂鉢



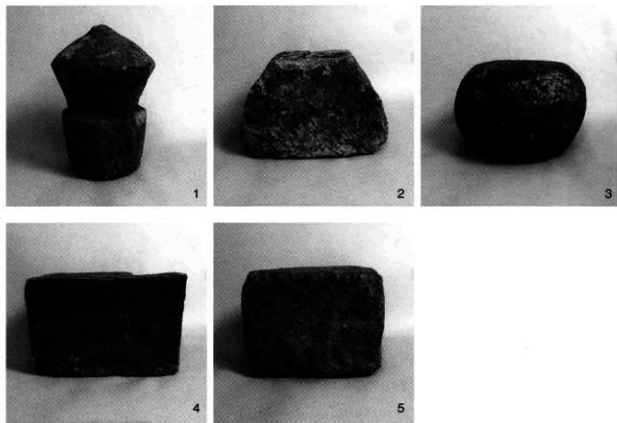
III区出土陶磁器



出土軒丸瓦

(2) 石造物

出土石造物の概要 調査では、5点の石造物が出土している。石造物は全て五輪塔であり、空風輪が1点、火輪が1点、水輪が1点、地輪が2点である。五輪塔は仏教の宇宙を構成する要素として空・風・火・水・地の五輪を表した石造物であり、中世の信仰対象物である。発掘調査では近世以降に廃棄あるいは構造物として転用されるものが多数であるが、Ⅲ-①区西部で出土した空風輪(1)・水輪(3)・地輪(4)は、花の丸造成盛土下の自然堆積層から近接した状態で出土しており、火輪は確認されていないものの、中世の五輪塔がそのまま埋没した可能性が想定される。またⅢ-②区で出土した(2)・(5)は、平らな面を上に向けて盛土に据えられており、近世以降に礎石として転用された状況が推察される。今回の調査では記録を有する石造物は確認されていないため、五輪塔の造立趣旨・制作年代等は定かではないが、石造物は松代城本丸石垣の裏込め石や御殿礎石としても転用されているため、築城以前に周辺に五輪塔等を造立する場が存在した可能性が高い。



出土石製品一覧表

番号	出土地点			石製品内容		石材	寸法 (cm)			備考
	地区	遺物番号	出土層位	種別	部位・形状		タテ	ヨコ1	ヨコ2	
1	Ⅲ-①	45	自然堆積	五輪塔	空風輪	安山岩(青目)	22.0	15.0	12.5	
2	Ⅲ-②	38	二次堆積	五輪塔	火輪	凝灰岩?	12.0	11.5	20.0	礎石転用か
3	Ⅲ-①	45	自然堆積	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	13.5	15.5	21.0	
4	Ⅲ-①	45	自然堆積	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	14.0	21.0	21.5	
5	Ⅲ-②	43	盛土	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	15.0	19.0	19.0	礎石転用か

寸法の「タテ」は製品の長さを示し、「ヨコ1」「ヨコ2」は断面ごとに異なる。以下「発掘記(ワコ1)」「ワコ2」。

写真編(空堀館大正 掲載順大正)、本編(土器編: 宇田田)、

図編(土器編: 宇田田)、地輪(空堀館大正)

第Ⅳ章 結語

第1節 花の丸御殿の推定位置

松代城の南西に位置する花の丸には、明和7年（1770）に5代藩主である真田幸弘によって、本丸から御殿が移されたとされる。以後、花の丸御殿は政務の場、藩主の居住域として利用されることとなるが、明治の廃城後には周囲の堀が埋没し、鉄道路線整備や宅地化によって花の丸の曲輪範囲でさえも視認できない状況であった。平成4～6年度に神田川改修にともなう発掘調査が実施され、旧千曲川筋を利用した百間堀や花の丸を外周する堀の一部が確認されたが、花の丸御殿に関連する遺構は確認されなかった。今回の調査では、石垣や堆積土層から花の丸曲輪の詳細な範囲が検出されたことに加え、御殿礎石と思われる石材が複数確認されたことにより、花の丸御殿範囲を推定することが可能となった。

花の丸御殿については、これまでに数点の指図が確認されている。そのうち、描かれた年号が示されているものは文化3年（1806）の写しと記された「花之御丸表御殿御絵図面」（真田宝物館所蔵）と万延元年（1860）の「花御丸御殿向御普請図」（長野市立博物館所蔵）、「花御丸御殿向御普請図面」（長野県立歴史館所蔵）のみである。「花之御丸表御殿御絵図面」は御殿のうち主に政務の場である表御殿について記したものであり、玄関や正面の広間などの大部分は万延元年の絵図と一致するが、詳細を比較すると一部異なる部位が確認できる。また万延元年の絵図には、多数の張り紙があり、花の丸御殿が江戸末期においても増改築を繰り返していた状況がうかがえる。また明治7年（1874）に描かれた「花ノ丸御殿弘下地割図」には御殿の名残とみられる外周の堀や池とともに敷地割りが記されており、現在の道路や調査成果と一致する。

今回の調査では、はじめて花の丸御殿のものと想定される礎石が数点検出されたが、調査位置が狭小であるため、検出礎石から具体的な御殿建物を推定することは困難な状況である。しかし、これまでの調査成果に加え、新たに検出された石垣や堆積土層の見解、絵図との比較から、花の丸の曲輪位置については、推察することが可能となった。ここでは、現存する花の丸御殿指図のうち、堀や外周水路、庭園（池）などを記した「花御丸御殿御絵図面」（松代小学校所蔵）の写し（トレース）図を調査成果に重ね合わせることで、現況における花の丸御殿の位置を推定する。ただし、この図はあくまでも推定される花の丸曲輪と数点の礎石検出状況に基づいて絵図を重ねたものであり、絵図記載内容の精査や今後の発掘調査によっては多少異なる可能性は否めない。現時点では、今回の調査によって既設道路下であっても花の丸御殿遺構は残存していることが判明したことを重要な成果とした上で、現存する花の丸御殿遺構の保全を進めるための資料として、推定位置を提示することとする。今後、この花の丸地区が、国史跡に指定されている松代城跡の本丸および二の丸の一部と同一の歴史的財産として、後世に受け継いでいくための保全策が求められている。

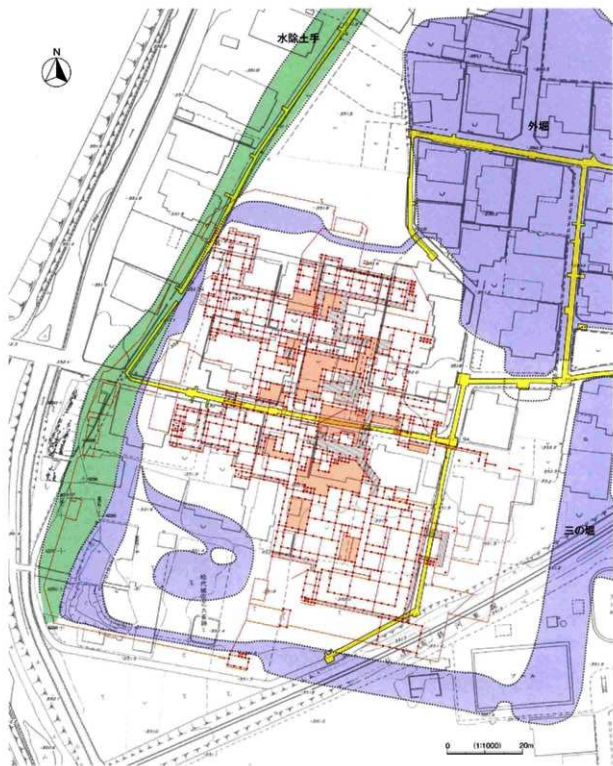
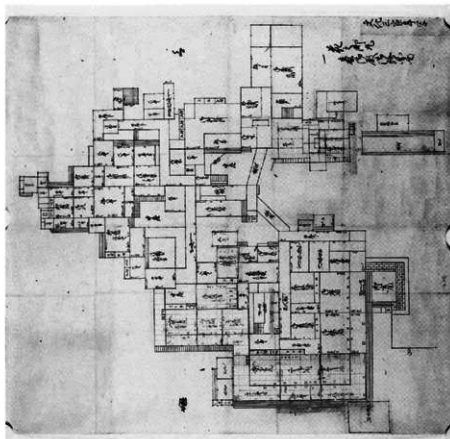
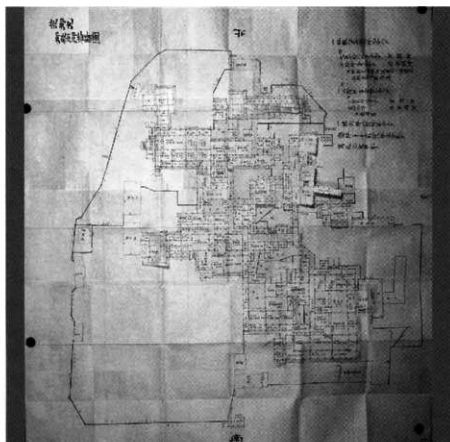


図13 花の丸御殿推定図



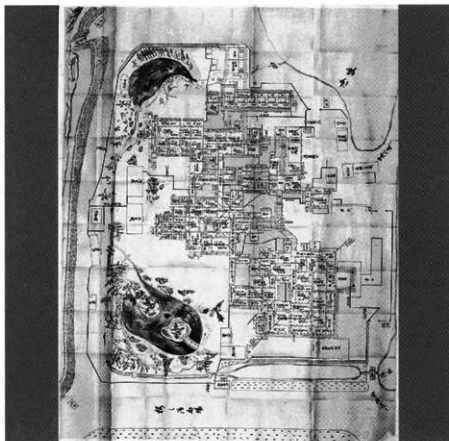
「花之御丸表御殿繪圖」
真田宝物館所藏



「花御丸御殿向御繪圖」
長野市立博物館所藏



「花ノ丸御殿私下地圖」
松代公民館所藏



「花御丸御殿繪圖面」
松代小学校所藏

引用・参考文献

- 飯田市教育委員会 2001 『飯田城下町遺跡』
- 飯山市教育委員会 2002a 『飯山城下情報センター敷地内遺跡』 飯山市埋蔵文化財調査報告書 第65集
- 飯山市教育委員会 2002b 『長野県史跡飯山城跡遺構確認調査報告書』 飯山市埋蔵文化財調査報告書 第67集
- 江戸遺跡研究会編 2001 『図説 江戸考古学研究辞典』 柏書房
- 江戸東京博物館編 1993 『江戸東京博物館総合案内』 財団法人江戸東京歴史財団
- 大塚初重ほか 1994 『八百八町の考古学』 シンポジウム江戸を掘る 山川出版社
- 大橋康二編 1988 『肥前磁器の変遷図』 『別冊太陽 古伊万里』 日本のこころ63 平凡社
- 大橋康二 1989 『肥前陶磁』 考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
- 大橋康二 2000 『九州陶磁概論』 『九州陶磁の百年』 九州近世陶磁学会10周年記念 図録
- 大橋康二 1995 『建築史からみた発掘資料』 『季刊考古学』 第53号 特集—江戸時代の発掘と文化 雄山閣出版
- 北原京子 1999 『江戸城外堀物語』 ちくま新書209 筑摩書房
- 北村 保 1987 『松代藩士の見聞録にみる江戸後期の松代城下町』 『松代—真田の歴史と文化— 創刊号 真田宝物館』
- 北村 保 1992 『近世松代火難雜考』 『松代—真田の歴史と文化— 第5号 真田宝物館』
- 北村 保 1993 『享保二年松代城大火焼失録』 『松代—真田の歴史と文化— 第6号 真田宝物館』
- 古泉 弘 1983 『江戸を掘る—近世考古学への招待—』 柏書房
- 古泉 弘 1985 『江戸の街の出土遺物—その展望—』 『季刊考古学』 第13号 特集—江戸時代を掘る 雄山閣出版
- 古泉 弘 1987 『江戸の考古学』 考古学ライブラリー48 ニュー・サイエンス社
- 佐々木達夫 1985 『物資の流れ—江戸の陶磁器—』 『季刊考古学』 第13号 特集—江戸時代を掘る 雄山閣出版
- 栗川典明・山下伊千造・南志郎 1992 『千曲川下流の歴史洪水の復元と考察』 『土木史研究』 第12号
- 信州大学工学部建築工学科松本研究室 1984 『長野市松代三町伝統環境保存計画策定調査報告書』
- 新宿区内藤町跡跡調査会ほか 1992 『内藤町遺跡』
- 竹内誠監修 2002 『ビジュアルガイド江戸時代館』 全1巻 小学館
- 田中誠三郎 1979 『真田一族と家臣団—その系譜をさぐる—』 信濃路
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1998 『東京大学構内遺跡調査研究年報』 2
- 東京都教育委員会 1991 『東京の遺跡展—お江戸八百八町地下探検—』 図録
- 長野市教育委員会 1982 『鹿岡都市 松代』 伝統的建造物群保存対策調査報告書
- 長野市教育委員会 1984 『潤いのある鹿岡都市づくり』
- 長野市教育委員会 1995 『松代城跡—国補神田川改修事業地点—』 長野市の埋蔵文化財第73集
- 長野市教育委員会 2005 『松代城下町跡—中木町・西木町・紺屋町—』 長野市の埋蔵文化財第109集
- 長野市教育委員会 2005 『松代城下町跡（2）—殿町—』 長野市の埋蔵文化財第110集
- 長野市教育委員会 2006 『松代城下町跡（3）—殿町—』 長野市の埋蔵文化財第114集
- 長浜文化財シンポジウム実行委員会 2000 『近世城下町の諸相』 シンポジウム発表資料
- 日本貨幣商協同組合 2001 『日本貨幣カタログ』
- 林美夫・青木美智男編 2001 『事典 しらべる江戸時代』 柏書房
- 降矢智男 2001 『甲信地方における肥前陶磁の出土状況について』 『国内出土の肥前陶磁』 第11回九州近世陶磁学会資料
- 本田博太郎 1970 『松代町の民家』 長野県教育委員会
- 松代藩文化施設管理事務所 1999 『城下町松代』 真田宝物館開館三〇周年記念 特別図録
- 松本市 1989 『史跡松本城北方外堀土塁発掘調査報告書』
- 松本市教育委員会 1989a 『史跡松本城黒門構内発掘調査報告書』
- 松本市教育委員会 1989b 『松本市城西西馬出遺跡緊急発掘調査報告書』 松本市文化財調査報告書No.79
- 松本市教育委員会 1996 『松本城下町跡 伊勢町—近世・町屋跡の発掘調査—』 松本市文化財調査報告書No.122
- 松本市教育委員会 1997 『松本城下町跡 伊勢町第8・9・12次、本町第1・2次』 平成8年度試掘調査報告書—松本市文化財調査報告書No.129
- 松本市教育委員会 2000 『松本城下町 本町第5次、伊勢町第19・21・22次、中町第1・2次、宮村町第1次』 平成10・11年度試掘調査報告書—松本市文化財調査報告書No.149
- 松本市教育委員会 2001 『松本城下町 伊勢町第23・24・25次』 平成12年度試掘調査報告書—松本市文化財調査報告書No.154
- 丸山岩三 1990 『寛保2年の千曲川洪水に関する研究（1）—（4）』 『水利科学』 第34巻第1～4号
- 山田啓一・田辺淳 1985 『千曲川における寛保2年（1742）8月大洪水の考察』 『第5回日本土木史研究発表会論文集』

報告書抄録

ふりがな	まつしろじょうあと							
書名	松代城跡(3)							
副書名	流域松代幹線系花の丸汚水準幹線事業地点							
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第124集							
編著者名	宿野隆史・小林由実							
編集機関	長野市教育委員会 長野市埋蔵文化財センター							
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL 026-284-0004・FAX 026-284-0106							
発行年月日	2009(平成21)年3月27日							
印刷所	鬼灯書籍株式会社(〒381-0012 長野市柳原2133-5 TEL 026-244-0235)							
所収遺跡名	所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
			市町村	遺跡番号				
松代城跡	長野県長野市松代町松代 16-47、265-277		20201	F-202	36° 33' 51"	138° 11' 39"	20080512) 20080918	1,060㎡
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
松代城跡	城跡	江戸時代	石垣、礎石、外堀 など	陶磁器、土器・土製品、石 製品(五輪塔)など				
要約	松代城跡花の丸想定地内において、下水道建設に伴う遺跡の確認調査を実施した。調査では、石垣や堀跡を確認し、堆積土層から花の丸曲輪地が推定された。また花の丸御殿の礎石と想定される石材も数点確認することができた。							

長野市の埋蔵文化財 発掘調査報告書一覧

1968年	第1集	『伊達長原古墳群』	1995年	第67集	『浅川原状地遺跡群 本村東沖遺跡Ⅱ』
1970年	第2集	『浅川西集』	第68集	『栗田城跡Ⅲ』	
1978年	第3集	『中村遺跡』	第69集	『浅川原状地遺跡群 徳阿木堂遺跡』	
	第4集	『塚崎遺跡群』	第70集	『八幡田沖遺跡』	
1979年	第5集	『塚崎遺跡群Ⅱ』	第71集	『浅川原状地遺跡群 ニツ宮遺跡②・吉田町東遺跡』	
1980年	第6集	『三輪遺跡・付水内生一元神社遺跡』	第72集	『塩崎遺跡群Ⅷ・石川糸里遺跡Ⅸ』	
	第7集	『田中沖遺跡』	第73集	『松代城跡』	
	第8集	『藤ノ井遺跡群』	第74集	『松代城跡』	
	第9集	『四ツ屋遺跡（第1～3次）・徳間遺跡・塚崎遺跡群③』	1996年	第75集	『浅川原状地遺跡群 吉田西三ツ屋遺跡・三輪遺跡⑥・栗河原遺跡』
1981年	第10集	『薄古墳群・長礼山古墳群・駒沢町遺跡』	第76集	『浅川原状地遺跡群 駒沢城跡・小島榊原遺跡群 中保遺跡Ⅱ』	
	第11集	『新清水遺跡・大崎遺跡・大清水遺跡』	第77集	『浅川原状地遺跡群 松ノ木田遺跡』	
1982年	第12集	『浅川原状地遺跡群 牟礼バイパスA・E地点』	第78集	『布施塚1号古墳・2号古墳』	
1983年	第13集	『浅川原状地遺跡群 畑田遺跡・川田糸里の遺構・石川糸里の遺構』	第79集	『船尾南遺跡』	
1984年	第14集	『石川糸里の遺構②・上駒沢遺跡』	第80集	『小島・榊原遺跡群 水内生一元神社遺跡Ⅱ』	
	第15集	『新清水遺跡②』	第81集	『新田原状地遺跡群 村南遺跡』	
1985年	第16集	『石川糸里の遺構③（付上駒沢遺跡）』	第82集	『浅川原状地遺跡群 松ノ木田遺跡Ⅱ』	
1986年	第17集	『浅川原状地遺跡群 牟礼バイパスB・C・D地点』	第83集	『下箕ヶ谷遺跡』	
	第18集	『塚崎遺跡群Ⅴ 幸道松節一・小田井神杜土遺跡』	第84集	『浅川原状地遺跡群 吉田古原遺跡Ⅱ』	
1987年	第19集	『上土狩塚古墳・重要遺跡確認緊急調査』	第85集	『上九反遺跡』	
	第20集	『三輪遺跡②』	第86集	『新田原状地遺跡群 寺川遺跡』	
	第21集	『浮田小学校遺跡』	第87集	『長野遺跡群 西町遺跡』	
	第22集	『長野市岡高校グラウンド遺跡』	第88集	『小島榊原遺跡群 水内生一元神社遺跡Ⅲ』	
1988年	第23集	『横田遺跡群 富士宮遺跡』	第89集	『新田原状地遺跡群 尾形城跡』	
	第24集	『塚崎遺跡群Ⅴ 殿屋敷遺跡』	第90集	『西前山古墳』	
	第25集	『小島榊原遺跡群 南川向遺跡』	第91集	『新田原状地遺跡群 西方遺跡・中沢城跡群』	
	第26集	『東香海遺跡』	第92集	『松原遺跡Ⅴ』	
	第27集	『小衆見城跡』	第93集	『栗河原遺跡②・田中沖遺跡Ⅱ』	
	第28集	『宮崎遺跡』	第94集	『浅川原状地遺跡群 小坂遺跡』	
	第29集	『浅川原状地遺跡群 浅川南遺跡』	1999年	第95集	『堀内遺跡群 高野遺跡』
	第30集	『旭附山古墳群』	2000年	第96集	『南宮遺跡Ⅱ』（第1分墳・遺構編）
	第31集	『阿川田遺跡』	2001年	第96集	『南宮遺跡Ⅱ』（第2分墳・遺物編）
1989年	第32集	『中条遺跡』	第97集	『長野市岡高校グラウンド遺跡Ⅱ』	
	第33集	『横田遺跡』	第98集	『田川氏館跡・岩崎遺跡Ⅱ』	
	第34集	『石川糸里遺跡④』	第99集	『浅川原状地遺跡群 徳阿木田遺跡』	
	第35集	『藤ノ井遺跡群Ⅱ』	2002年	第99集	『南宮遺跡Ⅱ』（第3分墳・写真編）
1990年	第36集	『原田遺跡Ⅱ』	第100集	『四ツ屋遺跡Ⅱ』	
	第37集	『藤ノ井遺跡群Ⅲ』	第101集	『藤ノ井遺跡群Ⅲ』	
1991年	第38集	『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡③』	2003年	第102集	『浅川南遺跡②・芝山遺跡 三合保西古墳・石川糸里遺跡Ⅹ』
	第39集	『塩崎遺跡群⑥・石川糸里遺跡⑤』	2004年	第103集	『藤ノ井南遺跡・浅川原状地遺跡群 辰巳池遺跡・本郷南遺跡』
	第40集	『松原遺跡』	第104集	『浅川原状地遺跡群 天神木遺跡・穂爪遺跡・権現堂遺跡』	
	第41集	『小島榊原遺跡群 中保遺跡』	第105集	『浅川原状地遺跡群 畑田遺跡②』	
		『浅川原状地遺跡群 押原遺跡・畑田遺跡』	2005年	第106集	『堀内遺跡群 南条遺跡』
1992年	第42集	『田中沖遺跡Ⅱ』	第107集	『新田原状地遺跡群 西方遺跡②』	
	第43集	『南宮遺跡』	第108集	『浅川原状地遺跡群 朝野宮西遺跡・権現堂遺跡②・吉田古原遺跡②③・菟目遺跡』	
	第44集	『塩崎遺跡群Ⅶ』	第109集	『松代城下町跡』	
	第45集	『石川糸里遺跡⑥』	第110集	『松代城下町跡Ⅱ』	
	第46集	『藤ノ井遺跡群④』	第111集	『石川糸里遺跡⑦・浅川原状地遺跡群 本村東沖遺跡③・上長無遺跡』	
	第47集	『浅川原状地遺跡群 ニツ宮遺跡・本屋遺跡・畑田遺跡・船場遺跡』（2分冊）	2006年	第112集	『浅川原状地遺跡群 吉田町東遺跡②』
	第48集	『小島榊原遺跡群 中保遺跡Ⅲ』（2分冊）	第113集	『小島・榊原遺跡群 水内生一元神社遺跡④』	
1993年	第49集	『浅川原状地遺跡群 三輪遺跡④』	第114集	『松代城下町跡Ⅲ』	
	第50集	『浅川原状地遺跡群 本村東沖遺跡』	第115集	『善光寺門前町跡』	
	第51集	『松原遺跡Ⅱ』	2007年	第116集	『平塚東沖遺跡』
	第52集	『田代居遺跡』	第117集	『藤ノ井遺跡群⑥』	
	第53集	『岩崎遺跡』	第118集	『吉田古原遺跡④』	
	第54集	『古町遺跡（浅人家）』	第119集	『吉田古原遺跡④①・田代居層遺跡②』	
	第55集	『浅川原状地遺跡群 駒沢町東遺跡Ⅱ』	2008年	第120集	『吉田古原遺跡⑤』
	第56集	『上見村遺跡』	第121集	『善光寺遺跡・善光寺門前町跡②』	
	第57集	『石川糸里遺跡⑦』	第122集	『浅川原状地遺跡群 ニツ宮遺跡③』	
	第58集	『松原遺跡Ⅲ』	2009年	第123集	『長岡町遺跡②』
	第59集	『兜塚松代藩 主貞田家墓所』			
1994年	第60集	『熊平遺跡・宮ノ下遺跡』			
	第61集	『栗田城跡②』			
	第62集	『浅川原状地遺跡群 三輪遺跡⑤・小島榊原遺跡群 上中島遺跡』			
	第63集	『松原遺跡Ⅳ』			
	第64集	『小島榊原遺跡群 宮西遺跡』			
	第65集	『浅川原状地遺跡群 牟礼バイパスB地点遺跡②』			
	第66集	『石川糸里遺跡⑧』			

長野市の埋蔵文化財第124集

松代城跡(3)

—流域松代幹線系花の丸汚水準幹線事業地点—

平成21年3月19日 印刷

平成21年3月27日 発行

発行 長野市教育委員会
編集 文化財課埋蔵文化財センター
印刷 鬼灯書籍株式会社